

みなとしみず

SINCE 1990.6

～清水港をはじめ静岡県内の「みなと」の旬な情報をお届けします！～

発行

国土交通省 中部地方整備局
清水港湾事務所

静岡市清水区日の出町7番2号

TEL 054-352-4146（代表）



事務所HP

<https://www.shimizu.pa.cbr.mlit.go.jp>

GFP輸出産地セミナーfrom清水が開催されました

清水港は、東名・新東名高速道路に加え、令和3年に中部横断自動車道（静岡 - 山梨間）が開通したことにより背後圏が拡大し、農水産品の生産地である山梨県、長野県、新潟県といった内陸部との交流や経済活動の活性化が期待されています。この高いアクセス性を活かし、清水港からの農産物・食品の輸出促進に向けて、官民が連携して取り組んでいます。

その取り組みの1つとして、6月5日（月）、清水テルサにおいて、「GFP輸出産地セミナーfrom清水」（主催：農林水産省 協力：中部地方整備局）が開催されました。農産物生産関係者や輸出事業者の皆様を対象とし、全国から約190名の参加がありました。

セミナーでは、清水港における農産品輸出拡大に向けた取組や輸出事例についての情報提供とともに、輸出拡大に向けた清水港の課題と今後の活路についての議論が行われました。

今後も、農産物等の広域的な輸出拠点としての清水港の機能強化に向けた取組を、官民一体となって推進して参ります。※GFP=農林水産物・食品輸出プロジェクト



セミナーの様子



交流会の様子

現場より：清水港富士見岸壁改良工事

穀物や木材チップ、セメント等の受入拠点である富士見地区では、老朽化した岸壁の改良工事を進めています。

今回の工事では、鋼管矢板14本を海底地盤まで打ち込む工事を行いました。これにより、施工個所の鋼管矢板全94本のうち、75本の打ち込みが完了しました。

今後も完了に向けて、着実に工事を進めて参ります。



作業船による鋼管矢板打設状況

ペリー黒船来航と開国を祝う 下田「黒船祭」に招待いただきました

下田沖は、海上交通の要衝であり、気象・海象条件が厳しい難所として知られています。このため下田港は、古くから荒天時の船舶の避難場所として利用されてきました。清水港湾事務所では、下田港の避泊面積拡大を目的に防波堤の整備を行っています。この防波堤整備事業は、港内静穏度の向上による観光船、漁船等の安全確保や津波に対する減災効果なども下田市の皆様から大きな期待を寄せられています。

同市では、5月19日（金）から21日（日）の3日間、黒船祭が執り行われ、「献花式」には、中部地方整備局長をはじめ、港湾空港部長、清水港湾事務所長も招待いただきました。このような歴史ある式典に招待して頂けることは、清水港湾事務所が実施している防波堤整備や同地区において沼津河川国道事務所が実施している伊豆縦貫自動車道の整備等、我々国土交通省が実施する事業への地域の期待の大きさの現れであると感じており、このような地域の皆様の期待に応えるべく、引き続き事業進捗に力を尽くしてまいります。



下田市の松木市長の祝辞

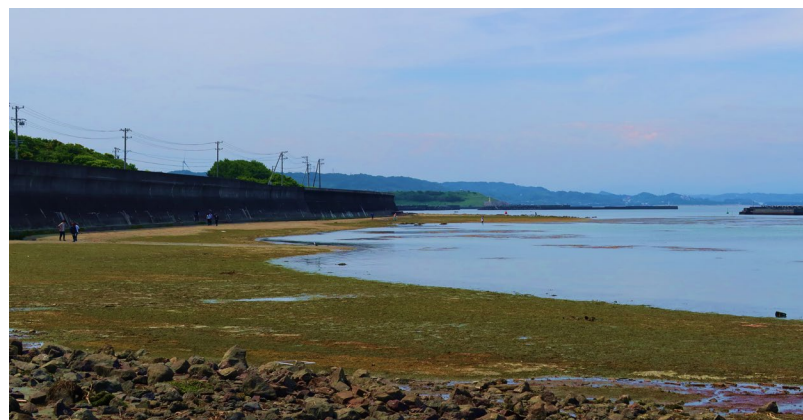


中部地方整備局長の献花

御前崎港久々生（くびしょう）海岸 ブルーカーボン現地調査を行いました

6月7日（水）、御前崎港の久々生（くびしょう）海岸において、静岡県と中部地方整備局との合同でコアマモ場の生育状況の確認や、ドローンを用いた空中写真撮影等の現地調査を行いました。

久々生海岸周辺のコアマモ場は、令和4年度の観測結果では、1.0tのCO₂の吸収源として期待され、令和4年度Jブルークレジット®の認証を受けており、今回の調査結果は今年度のクレジット申請に活用される予定です。



久々生海岸のコアマモ場



久々生海岸のコアマモ場
（ドローンにて撮影）

県内各港にクルーズ船が寄港しました

【御前崎港 ウエステルダム寄港】

4月11日（火）、御前崎港に外国クルーズ船ウエステルダムが寄港しました。御前崎港に外国クルーズ船が寄港するのは今回が初めてであり、西ふ頭岸壁では、歓迎イベントとしてなぶら御前太鼓や書道パフォーマンスが披露され、地域の特産品を販売するコーナーでは茶もみ体験を楽しむ乗客の姿も見られました。外国客船を一目見ようと訪れる見学客も多く、ふ頭一帯が大変賑わいました。



ウエステルダム



歓迎式典の様子



埠頭の賑わい

【田子の浦港 スターブリーズ寄港】

4月17日（月）、田子の浦港に初の外国クルーズ船スターブリーズが寄港しました。同船はアメリカの自転車メーカーによるチャーター船で、自転車愛好家の乗客は各々船に積んだ自転車で、富士市内のサイクリングを楽しんでいました。



スターブリーズ



歓迎式典の様子



自転車で出発する乗客

【清水港 4月以降、計20隻寄港】

清水港では4月から6月に計20隻のクルーズ船が寄港しました。4月3日（月）にはダイヤモンドプリンセスが寄港し、平日にも関わらず多くの見学客が日の出ふ頭を訪れました。乗客はバスやタクシーで日本平夢テラス、久能山東照宮、富士山世界遺産センターなど、県内の様々な観光地を巡りました。

今後の清水港への寄港予定は清水港客船誘致委員会のHP (<https://shimizu-port.jp>) をご覧ください。



左：ダイヤモンドプリンセス

右：見学客で賑わう日の出ふ頭



清水海上技術短期大学校が清水コンテナターミナルを見学しました

4月27日（木）、国立清水海上技術短期大学校の新入生115名を対象にコンテナターミナルの見学会を開催しました。清水港の概要説明、展望室からのコンテナターミナル全体の見学に加え、コンテナヤード内をバスに乗って見学し、間近でコンテナ船からコンテナが積み下ろされる様子を眺めました。

清水海上技術短期大学校の概要

- 独立行政法人 海技教育機構
- 船員に必要な専門教育を行い、海技士の免許の取得等を図る。
- 卒業生の多くは国内輸送に従事する内航船舶の船員として就職



室内学習の様子

学生からは熱心な質問や「貴重な経験ができた」「実際に見ることができて勉強になった」との感想があり、港湾についての理解を深めてもらう機会になりました。



展望室からの見学の様子



コンテナヤード見学の様子

みなとの見学会を開催しています

6月15日（木）、山梨市立加納岩小学校5年生を対象に、清水港コンテナターミナルでの見学会を開催しました。清水港湾事務所では、港の概要や役割について多くの人に理解してもらうために、教育機関向けの見学会としてコンテナターミナル見学や海上見学を行っています。教育機関以外の方々も対象として、港湾の工事現場を見学できる「旬な現場」の見学も開催しているので、興味のある方は是非HPをご覧ください。

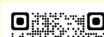


展望室からの見学の様子



荷役機械体験の様子

詳しくはこちらをチェック！



教育機関向け
清水港湾事務所HP

<https://www.shimizu.pa.cbr.mlit.go.jp/502/870>



旬な現場
中部地整HP

https://www.cbr.mlit.go.jp/local_info/sougou/contents/shisetsu/construction/g-enba.htm

海とみなとの相談窓口



全国共通フリーダイヤル

おいに よくなれ みなと

0120-497-370

受付時間：9時30分～12時、13時～17時（土・日、祝祭日は除く）
携帯電話からもご利用いただけます

- ・海やみなとの利用に関すること
- ・総合的な学習時間に関すること
- ・みなとの構想や計画に関すること
- ・海洋土木技術に関すること
- ・みなとの防災に関すること

その他、海とみなとに関することは
何でもお問い合わせください

■お問い合わせ先■

清水港湾事務所 企画調整課
TEL 054-352-4148

pa.cbr-shimizukouwan@mlit.go.jp

ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

清水港湾事務所では、学校、企業、自治会の皆様を対象にみなと見学会を行っています。
詳しくは、ホームページをご覧ください

シリーズ「続・富士川水運」塩の町：竹原

富士川水運を利用して、甲州より清水湊（しみずみなと）に運ばれた年貢米「甲州廻米（こうしゅうかいまい）」について、その成り立ちや、経路に関して前回のシリーズで御紹介させて頂きました。今回は、廻米の帰途はもちろん、清水湊より年間を通じて甲州方面に運ばれた「塩」について、お話したいと思います。



出典：国土地理院

江戸時代、清水湊には「竹原塩」（安芸）、「波止浜（はしはま）塩」（伊予）など、遠方の瀬戸内の塩が多く運ばれていました。清水市史によると、元文二（1737）年には61,837俵、翌元文三（1738）年にも60,630

俵と、6万俵を超える塩が移入しており、その多くが甲州方面に流通していきま

した。「竹原塩」の産地、竹原市は、広島県のほぼ真ん中、瀬戸内海に面した町で人口は23,000人ほど。企業としてはジャムなどの食品事業を手掛けるアラハタの本社があり、竹原港からは、うさぎの島として有名な大久野島（おおくのしま）へのフェリーが出ています。

竹原市史によると、江戸時代初期、広島藩は領内の新田開発を盛んに行っており、3方向を山に囲まれた竹原でも耕作地を増やすべく正保三年（1646）年2月より翌年にかけて藩内全域より人夫を動員、潮止め用の堤を設けるなどして、75町歩（約225,000坪）余りに及ぶ大規模な新田開発事業をしました。しかし、入江に近い地区は土壌に塩分が多く、作物に適さなかった為、しばらく放棄地となってしまう。赤穂から竹原に集まる薪を買い付けに来ていた商人が「下げ潮が強いこのような土地は塩作りが向いている」と勧めた事がきっかけになり、農耕地から塩田による塩作りへと事業転換され、「竹原塩」の一大産地へと発展して行きます。当時赤穂藩（兵庫県赤穂市）は、江戸時代初期に浅野家が藩主となり、当時最も進んだ「入浜（いりはま）式塩田」を大規模に導入した事により、収量が増加し、有数の塩の産地となっていました。広島藩と赤穂藩は、浅野家の本家分家の関係であった事もあり、最新の「入浜式塩田」の技術が赤穂より技術導入しやすかった点も大きかったようです。

「塩が育んだ文化の町 竹原」（竹原郷土文化研究会）によると、慶安元（1648）年2カ所の試作塩田から始まった塩作りは、竹原の地形も幸いし、4年後の年承応元（1652）年には、塩田の数も98カ所、面積も18町6反（約56,000坪）と



塩田跡に残る塩釜用の煙突

急速に増加、塩産地として歩み始めます。

瀬戸内では、古くから塩の製造は、盛んに行われていました。鎌倉時代付近から



広島県竹原市：町並み保存地区

らは「揚げ浜（あげはま）式」という海水を海に汲みに行き、塩田の砂地の上に撒きまくという製法を用いていました。満潮面より高い砂浜を塩が付着しやすいように粒の揃った砂で平らに整え、その上に海水を撒いていきます。天日でさらされた塩の付着した砂を集めて、濃縮した塩水（かん水）を作り、釜で炊いて、塩を得ていました。この製法は、海水をそのまま煮て作るより、短時間で良質な塩を手に入れましたが、海水を汲み上げて、満潮面より高い塩田まで運ぶという労力が必要となりました。また、ある程度の砂の面

積が必要であったため、塩田となる場所にも制約がありました。

赤穂で導入された「入浜式」は、堤で囲まれた塩田を満潮面より低く作り、その周囲に海水が通る溝を作り、干満の差と毛細管現象により、塩田にまいてある砂に塩が付着させるという製法でした。揚げ浜式と同様、表面に塩が付着した砂を、塩田の中心に「沼井（ぬい）」と呼ばれる場所に集め、その砂に海水を注いで、濾過し、塩分濃度の濃い塩水を作っていきます。この作業を繰り返して出来た高濃度の塩水「かんすい」を煮詰める事により塩を作っていました。

入浜式塩田により「塩」の一大産地となった竹原の生産量は、正徳年間（1711年～1715年）には28万俵（1俵＝5斗と換算すると、約100キロ）2万8千トンの塩が生産され、その一部が、舟で清水湊を経て、富士川水運等で甲州方面まで運ばれていました。雨の少ない瀬戸内の気候に適した「塩」は季節、



時をかける少女（大林宣彦監督）のロケ地になった西方寺・普明閣からの眺望

時期に関係なく通年生産されており、塩害による耕作不適地に悩まされていた竹原に、富と繁栄をもたらしていきます。

現在、竹原市の街並み保存地区には、塩田経営から塩問屋業、更に元禄16（1703）年には千石積の舟を建造して廻船業にも乗り出すなどした「吉井邸」、製塩業の傍ら酒造業を始め、のちにニッカウヰスキーの創業者となった竹鶴政孝氏の生家「竹鶴邸」、京都の清水寺を模して造られた西方寺・普明閣など、重要文化財や史跡となる建物が立ち並び、映画、ドラマの撮影地としても登場しています。

前回までのシリーズ「富士川水運」（全8回）が気になった方は、こちらから確認できます！（清水港湾事務所 HP）



寄稿者：山口博史（やまぐちひろふみ）1968年静岡市清水区生まれ。フォトグラファー、テレビ技術スタッフ番組取材等の資料を纏めた「エアガール」「クルーズ船ガイド」「富士川水運」など執筆。